

『和英語林集成』 「和英の部」 の用例と『南総里見八犬伝』

江 崎 裕 子

1. はじめに

ヘボン (James Curtis Hepburn ; 1815 - 1911) は『和英語林集成』編集に際し、見出し語については、『日葡辞書』⁽¹⁾、メドハーストの小語彙集、『節用集』⁽²⁾等の辞書や、古典や人々の話し言葉を参考にしたことが、明らかになっている (飛田、1964, 1965)。また用例に関しては、『日葡辞書』を相当参考にしている (岡本、1973, 1974)。江崎 (1991) では、その一部が『東海道中膝栗毛』と一致することが明らかにされた。しかし、この調査はグリフィス (W.E.Griffis) が著した伝記『Hepburn of Japan and his wife and helpmates』 (Griffis、1913) 中の記載を手掛かりにして成されたもので、一致用例数も少なく、その他の文献の調査が必要であった。

そこで本稿では、さらに他書との比較研究を進め、『和英語林集成』の用例の性格をさらに具体的に明確にしていきたい。

グリフィスによる伝記には「ヘボンは何冊も日本語の小説を読んだ。それらは歴史的、空想的小説であり、古典や流行本であった。彼は教養ある丁寧語だけでなく、庶民の日常語の必然性に気付き、庶民の言葉に耳を傾け、慣用句を収集した。⁽³⁾」とある (Griffis、1913;126)。この記述から、本稿では当時江戸で流行した小説を比較研究の文献とすることにした。

ヘボンは1859年 (安正6) に来日し、以後『和英語林集成』が出版される1867年の前年である1866年まで、7年間日本語の勉強と『和英語林集成』編集に取り組んだ。この幕末期に江戸で流行した小説と言えば、滑稽本と並んで後期読本が挙げられる。中でも曲亭馬琴 (1767 - 1848) は江戸時代後期を代表する読本作家である。代表作『椿説弓張月』と『南総里見八犬伝』はあらゆる階層に渡って読まれ、殊に、後者は時には朗誦によって暗記された (高田、1990)。庶民に音読、朗誦された文章こそ、ヘボンの言う「庶民の日常語」であり「庶民の言葉」である可能性がある。『南総里見八犬伝』は1814 (文化11) 年から1842 (天保13) 年にかけて28年間、106冊に渡って書き続けられた長編であり、『椿説弓張月』よりも広範囲の江戸語が網羅されているとの判断から本書を『和英語林集

成』の比較対照文献として選ぶことにした。

2. 『南総里見八犬伝』と『和英語林集成』の用例との比較

『和英語林集成』の用例を取り扱うに際しては、『和英語林集成』（「和英の部」）と『東海道中膝栗毛』（P.3）における用例の定義を踏襲した。尚、本稿の考察には初版（1966、北辰、復刻版）、再版（1970、東洋文庫、復刻版）、第三版（1974、講談社、復刻版）を用いた。

すなわち、

- （１）文と名詞修飾は用例とする。
- （２）細目見出しは用例とする。
- （３）「adv.」と明記された見出し語に「する」「なる」が付随する場合は用例とする。
- （４）サ変動詞は用例としない。
- （５）文法的活用は用例としない。
- （６）初版、再版、第三版には一部にローマ字表記の異同があるが、同一用例と見なす。

の６点に留意したものである。

初版の総例数は14859、うちAで始まる言葉（Aの部）の用例数は659を数えた。本調査では時間的制約から、全体の4.4%(659/14859)にあたるAの部の用例に限定し調べることにした。また今後、用例の異同の背景を研究する時の参考に第三版までの用例を調査した。Aの部の用例数は再版787、第三版926である。

一方『南総里見八犬伝』は、岩波文庫（全十冊、1991年12月5日第3刷他、校訂者小池藤五郎）を文献として使用した。本書の凡例（第一冊、xiii）には、「一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。」とあり、原本に極めて忠実である。

調査に際しては『南総里見八犬伝』の第一冊から第十冊までの本文から『和英語林集成』の用例と一致、もしくは類似した表現を選び出し、対照一覧表に記した。繰り返し現れる同一表現は、最初に記されたもののみを拾った。

3. 用例の対照一覧とその分析

引用に当っては『和英語林集成』のローマ字綴りは片仮名に改め、また見出し語の動詞は原文では連用形であるが、本稿では終止形で記した。1,2,3は、それぞれ初版、再版、第三版に当該用例が記載されていることを示す。p.は『日葡辞書』にも記載のある用例である（江崎、1991）。『和英語林集成』の用例に英訳のあるものは、これを併せて記した。

『南総里見八犬伝』からの引用は、同一、もしくは類似表現と判断できる数文節を拾い、文章単位ではない。文末に記したa,b,cの記号は後の分析に際して分類した結果である。

見出し語	『和英語林集成』	巻、頁、行	『南総里見八犬伝』
アブミ 鐙	1.2.P.アブミヲフンバル to stand on the strips (in the manner of Japanese)	1, 143, 15	^{あぶみふんば} 鐙踏張り b
アダ 仇	1.2.3.アダヲウツ	3, 51, 13	^{しゅう あた うち} 主の讐を撃たり b
アダ 仇	1.2.3.アダヲカエス to kill an enemy	1, 73, 11	^{あた かへ} 古主の讐を復さん b
アダ 仇	1.2.3.アダヲムクウ	2, 140, 15	^{あた むく} 君父の讐を報ふ b
アダシ 他	1.2.3.P.アダシヒト another person	1, 206, 6	^{あだしひと} 他人は従ふも a
アダシ 他	1.2.3.P.アダシヨ another world	5, 163, 6	あだし世に a
アダシ 他	1.2.3.アダシガミ other gods	5, 435, 6	^{あだ がみ} 他し神の a
アズカル	3.アズカリオク to put in the charge or keeping of another	8, 295, 14	^{しか しばらくあずか おき} 小らば 権旦預り措て b
アガキ	1.2.3.ウマノアガキヲハヤ メル to make the horse gallop faster	1, 37, 13	^{あがき} 馬の足搔を早むれば b
アガキ	3.アガキヲイソガス	1, 142, 13	ひたすら足搔をいそがし つつ b
アゲル 上	1.2.3.P.ナヲアゲル to be famous	2, 213, 2	^{あげ} 名を揚 b
アゲル 上	1.2.3.シアゲル to finish doing	9, 245, 16	^{さいく りゅうりゅう しあげ} 細工は 流々 落成を見て b
アイ	3.アイタスケル to help each other	3, 72, 6	^{あひたすけ} 相資んのみ b

アイオイ	3.アイオイマツ	3, 193, 3	<small>あひおひ</small> 相生の松	b
アイタイ	3.P.クモアイタイトシテ タナビク	1, 288, 5	<small>あいたい</small> 靉靆と、 <small>びき</small> 紫の雲たな引て	b
アジワイ	1.2.3.アジワイガナイ	2, 251, 15	<small>あぢは</small> 味ひなし	b
アカイ 赤	2.3.アカイココロ a sincere heart	10, 237, 2	<small>あかきこころ</small> 赤心 示ししかば	b
アカジミタ 垢染	1.2.3.アカジミタキモノ dirty clothes	10, 47, 13	<small>たへ じょうえ あかじみ</small> 栲の浄衣の垢染しを	c
アカラサマ ニ 赤地 (3白地)	1.2.3.アカラサマニイウ to speak the whole truth	3, 410, 10	<small>あからさま</small> 明白地にはいひがたき	b
アケル 飽	3.アケルケシキナク no sign of being tired of	1, 137, 9	<small>ひねもすあけ</small> 終日倦る気色なく	a
アキ 秋	3.アキノクレ end of fall	2, 102, 9	わが身一つの秋の暮	a
アキ 空	3.アキイエ vacant house	3, 345, 5	<small>あきや</small> 空房	c
アク 飽	2.3.アクコトヲシラズ never satisfied	1, 120, 8	飽ことしらぬ	b
アク 悪	1.2.3.P.アクヲコラス to punish wickedness	10, 46, 2	<small>ただそのあく こら</small> 只其悪を懲さん為なり	b
アマル 餘	1.2.3.P.テニアマル too strong for, too much for one's strength	8, 360, 8	手に余る者あれば	a
アマツ	1.2.3.P.アマツヒ	3, 54, 11	<small>あまつひ</small> 天日	a
アメ 天	1.2.3.アメツチ heaven and earth	9, 302, 7	<small>きんこひま あめつち</small> 金鼓間なく天地を	a
アメ 雨	1.2.3.アメガハレタ the rain has cleared off	1, 26, 4	<small>あめはれ</small> 雨霽	b
アンマ按摩	1.2.3.アンマヲトル to shampoo	4, 291, 8	<small>ため あんま とり</small> 人の与に按摩を執けり	b
アンピ安否	1.2.3.アンピヲトウ to inquire after the	2, 12, 10	安否を問ふものから	a

アンピ安否	health 1.2.3.アンピヲシラセル to inform as to one's health	4, 14, 15	みずから安否をしらせん とてか b
アン 案	1.2.3.アンニタガワズ not different from what was supposed	3, 217, 11	かね はか あん たが 予て謀りし案に違わず a
アナ 阿那	1.2.3.アナウレシヤ how delightful!	4, 181, 7	うれ あな嬉しや a
アナ 阿那	1.2.3.アナヤトバカリ サケブ could only exclaim, oh!	1, 78, 2	あなや 女房子供は吐嗟と叫びて b
アナドル悔	1.2.3.ショウテキヲアナ ドルコトナカレ don't despise a weak enemy	6, 274, 7	あなど 小敵なりとて 悔りがたき c
アニ 豈	1.2.3.アニハカランヤ how unexpected!	3, 274, 4	あに 豈料らんや a
アオグ 仰	1.2.3.アオギミル to look up at	5, 46, 1	あほきみ つくづくと瞻仰て b
アオグ 仰	1.2.3.アオギフス to lie with the face turned upward	10, 321, 16	あほきふ めいげん 仰臥しても瞑眩せず b
アオク 青	1.2.3.アオクナル to become green	2, 118, 10	あをく 顔色水より 蒼なりて b
アオザメル 青醒	1.2.3.イロアオザメテ ミエル he became of a livid color	3, 389, 5	いろ あおざめ はなだいろ にた 顔色蒼然、 縹 なる仁田 やまつむぎ 山紬に c
アラズ 非	3.アノヒトハタダビトニ アラズ he is not a common man	1, 136, 4	ただひと 凡人にはあらざりけり b
アラン	1.2.3.カクアラントオモ イシユエ because I	6, 303, 2	かく 慙やあらんと思ふばか りに c

アラン	thought it would be so 1.2.3.イノチノアランカギ リタタカウ to fight as long as there is life	3, 61, 9	わが命のあらん ^{かぎ} 際り、 思ひの ^{まま} 随に戦ふて	b
アラス 荒	1.2.3.イノシシガハタケヲ アラス the wild hogs spoil the fields	3, 233,	^{そもそも} 仰 この野猪は....芋を ^{はた} ほり ^{あら} 圃を暴す	c
アラタマ璞	1.2.P.アラタマノトシ the year	1, 129, 6	あら玉の年を迎る門松 は	a
アラタメル 改	1.2.3.ココロヲアラタメル to alter one's mind	3, 217, 14	虎狼の心を改めずば	b
アラタメル 改	1.2.3.ナヲアラタメル to change the name	2, 140, 14	名を ^{あらた} 更め	b
アラテ新手	1.2.3.P.アラテヨイレカエ ル to bring up fresh troops in place of those exhausted	1, 158, 5	^{あらて} 新隊を入れかえて	b
アラワス著	1.2.3.ホンヲアラワス to publish or bring out a book	6, 10, 5	^よ 予が ^{あらは} 著したる物の本	c
アリアケ 有明	1.2.3.P.アリアケノツキ the morning moon	2, 87, 7	^{ありあけ} 在明の月ぞはかなき	a
アリノママ 在儘	1.2.3.アリノママニハナス to state or tell truly	1, 223, 14	これらのよしをありの ^{まま} 随に ^つ 告げて	c
アル 有	3.アルヒ on a certain day	1, 210, 4	^{あるひ} 有一日	a
アル 有	1.2.3.P.アルヒト a certain man or some person	3, 45, 8	^{あるひと} 或	a
アル 有	1.2.3.アルトキ on a certain time	3, 46, 8	或ときは	a

アサル足探	1.2.3.エヲアサル to scratch and search for food as a fowl	3, 187, 8	餌を求 ^{あさ} 食 ^{むらすずめ} る 群雀 の	a
アシ 足	1.2.3.P.アシニマカセテ ユク to go not knowing where	2, 117, 11	足に信 ^{まか} して将 ^{ゆき} て去ぬ	b
アシバ足場	2.3.P. アシバガワルイ the road or the traveling is bad	3, 94, 13	ここは足場の悪かるぞ	b
アシズリ 足摺	1.2.3.アシズリヲシテナク to dance and cry as a child	6, 30, 11	蹠 ^{あしずり} しつつ、うち泣 ^な ての み候ひしを	b
アス 翌日	2.3.アスノヨ tomorrow night	4, 301, 8	翌 ^{あす} の夜 ^よ	a
アタイ 直	1.2.3.アタイハイクラ what is the price?	10, 197, 7	価 ^{あたひ} は何ばかりに候や ^{いか}	c
アタリ 邊	1.2.3.ノンドノアタリニ near the throat	4, 88, 2	吭 ^{のんど} のあたりを	b
アタリ 邊	1.2.3.P.アタリヲハラウ to clear away those near (as with a sword)	1, 85, 16	図 ^{あたり} 下 ^{はらふ} を払て	b
アト 跡	1.2.3.P.アトヲツケル to make a mark	2, 118, 9	処々に 印 ^{あとつけ} たり	b
アット	1.2. アットサケブ	3, 374, 6	「苦 ^{あつ} 」と叫 ^{さけ} びて	b
アワレ 哀	1.2.3.P.アワレヲモヨオス to feel compassion	1, 22, 9	哀れを催すものから	a
アワセル合	3.メヲアワセル to look at each other	1, 152, 13	目と目をあはすれば	b
アワセル合	1.2.3.P.チカラヲアワセル to unite strength or do altogether	1, 17, 19	憲 ^{のりさね} 実 ^{あは} に力を戮し	b
アヤマチ過	1.2.3.アヤマチヲアラタメ	2, 222, 7	愆 ^{あやまち} を改んと誓ひし	b

	ル to rectify a mistake or reform one's fault			
アヤメ文目	1.2.3.モノノアヤメモワカ ヌヤミヨ a night so dark that the forms of things could not be distinguished	9, 178, 3	真夜中過ぎたる ^{こち} 時候にし て黒白も分ぬ ^{あやめ} 烏夜 ^{やみ} なれば	a
アヤウイ危	3.アヤウキコトヲスル to run a risk	2, 33, 2	かかれ ^{あやう} ば信乃が危きこと	c
アヤシム怪	1.2.3.アヤシムニタラズ not a matter to be surprised at, or to be suspicious of	6, 114, 2	^{あやし} 怪むに足らず	a
アエズ不 _レ 敢	1.2.3.イキモツキアエズ without taking breath	3, 222, 5	^{いきつき} 息 _レ あへず	b
アエグ 喘	1.2.3.アエイデハシル to run panting	3, 225, 6	^{あへ} 喘ぎて走る足音に	b
アエテ 敢	1.2.3.アエテセズ would not dare to do	8, 254, 1	^{あへて} 敢 又 ^{たやすく} 容易せず	b
アエテ 敢	3.アエテキカズ would not listen	5, 263, 14	^{たがふ} 違 ^{あへてき} をもて敢 _レ 听かず	a

以上、類似を含む一致表現は計75を数えた。内訳は、
初版と一致 58、
再版と一致 62（再版で消滅したもの 0、再版から新たに記載されたもの 4）、
第三版と一致 71（第三版で消滅したもの 4、第三版から新たに記載されたもの 13）、
『日葡辞書』にも用例があるもの 17
である。

一致（類似を含む）表現は以下のごとく分類される。

- a.両者が全く一致する表現 23
- b.清濁、活用形、助詞等に相違がみられる表現 42
- c.一部の単語に相違が見られる類似表現 10

これらを考察すると、まず a.両者が全く一致する表現では、「アダシヒト」「アキノ

クレ」「アマツヒ」「アメツチ」「アルヒ」「アリアケノツキ」といった複合名詞、乃至は名詞修飾の形を取ったものが12ある。内5用例は『日葡辞書』にも記載があり、文字数から考えても『南総里見八犬伝』に限らず各方面で使用されていた表現と言えよう。

しかし残る11の文章単位の用例は、「アケルケシキナク」「テニアマル」「アンピヲトウ」「アンニタガワズ」「アナウレシヤ」「アニハカランヤ」「エヲアサル」「アワレヲモヨオス」「モノノアヤメモワカヌヤミヨ」「アヤシムニタラズ」「アエテキカズ」であるが、用例の内容と長さを考慮すると、『南総里見八犬伝』で描かれる世界の時代性と物語性を示唆してはいまいか。

さらに、b.清濁、活用形、助詞等に相違がみられる表現を考察すると、これは次のように分類できる。

イ.清濁の異同

ⅰ.活用形、助詞の異同

イ.清濁の異同は、見出し語「アダ」における3用例にみられる。すなわち「アダヲウツ」（『和英語林集成』） \longleftrightarrow 「アタヲウチタリ」（『南総里見八犬伝』における記載は片仮名に書き換える。以下同）、「アダヲカエス」 \longleftrightarrow 「アタヲカヘサン」、「アダヲムクウ」 \longleftrightarrow 「アタヲムクフ」である。問題は「アタ」 \longleftrightarrow 「アダ」の異同であるが、実は『和英語林集成』には「ATA アタ」の見出し語も存在し、定義、用例の後、「Same as ada.」の記載がある。当時は両方の語が使用されていたと思われ、ヘボンにおいては同一語の認識があったと考えられる。これらの内2例は同時に活用形の異同も併せ持っており、ⅱ.の観点からの分類に含めることもできる。

ⅱ.活用形、助詞の異同は38例を数える。活用形の異同としては、「アラテヲイレカエル」 \longleftrightarrow 「アラテヲイレカエテ」、「アタリヲハラウ」 \longleftrightarrow 「アタリヲハラフテ」、「アットサケブ」 \longleftrightarrow 「アットサケビテ」、「チカラヲアワセル」 \longleftrightarrow 「チカラヲアワシ」、「ウマノアガキヲハヤメル」 \longleftrightarrow 「ウマノアガキヲハヤムレバ」、「アガキヲイソガス」 \longleftrightarrow 「アガキヲイソガシツツ」など、終止形と連用形等その他の形との対比として把握できる。言い換えれば、辞書の用例として端的な形を示す単文と、小説の話の筋を展開し、技巧を凝らした叙景文を構成する重文や複文の一部との対比なのである。ここで、ヘボンの辞書作成の動機が、来たるキリスト教布教と聖書翻訳の準備段階であったことを思い起こすと（高谷、1959）、ヘボンの用例は言葉の意味や慣用句的な使い方を示唆するための例文のほずである。とすれば、活用形の異同は大きな問題ではなく、如何なる言葉が如何なる文章において用いられたかという側面で、両者は一致していると言えるであろう。

また助詞の異同では、「アイオイマツ」 \longleftrightarrow 「アイオイノマツ」、「ノンドノアタリニ」 \longleftrightarrow 「ノンドノアタリヲ」等が挙げられるが、これらも意味内容の側面から見れば一致例文と判断してよいだろう。

最後に、c.一部の単語に相違が見られる類似表現とは「ショウテキヲアナドルコトナカレ」 \longleftrightarrow 「ショウテキナリトテアナドリガタキ」、「イロアオザメテミエル」 \longleftrightarrow 「イロアオザメ」、「カクアラントオモイシユエ」 \longleftrightarrow 「カクヤアラントオモフバカリニ」等である。これらは明らかに類似表現であるが、複数の語の一致があり、しかもヘボンの英訳は概ね『南総里見八犬伝』記載の表現が意味するところと合致している。

以上を総合すると、両者は数値的には初版で8.8%(58/659)、再版で7.9%(62/787)、第三版で7.7%(71/926)一致もしくは類似する。この数値は『和英語林集成』と『日葡辞書』の一致用例数（Aの部）が19.3%(127/659)であることを参照すると、一小説としては非常に高い一致率である。さらに一致用例の内容を考察すると、文字数が少ない複合名詞だけでなく、長くて意味内容の深い特殊な状況で使われる表現が数多い。

4. おわりに

ヘボンの『和英語林集成』（「和英の部」）の用例は、『南総里見八犬伝』に記載されている語句や文と多くの一致がみられる。すなわち江戸後期読本の代表作である『南総里見八犬伝』に現れる書き言葉の表現が、場合によっては多少形を変えて『和英語林集成』の用例の一部を構成している。

『南総里見八犬伝』は、全体的構想及び人物の設定は空想物語の世界であるが、文章は当時の言葉や表現を駆使して修辭的な技巧を凝らした迫力のある長編小説である。そして人々に音読、朗誦もされたその文章・文体をヘボンが逐一研究し、用例として採用したことも類推できるのである。

今後は『椿説弓張月』、或いは人情本や洒落本との比較考察を通し、ヘボンの用例の性格をより実証的に解明していきたい。

《注》

- (1)ヘボンが参考にしたのが、イエズス会宣教師数名により1603年に刊行された『日葡辞書』長崎版か、パジェス（Páges León）によるその仏訳『日仏辞書』であるかは明らかでない。
- (2)飛田は、江戸時代後期の1848年からヘボンの原稿が完成されたと思われる1864年に出版された『節用集』38種のうち、ヘボンが数冊の『節用集』を使用したのは間違いなく、その中心は『大日本永代節用無尽蔵』（1849）だと推論している。（飛田、1965）
- (3)筆者が訳した。

参考文献

- 江崎裕子(1991)「『和英語林集成』(「和英の部」)と『東海道中膝栗毛』」『ICU Language Research Bulletin』vol.6 No.1
- 岡本 勲(1973)「『和英語林集成』と『日葡辞書』(研究編)」『文学部紀要』8-1、中京大学学術研究会
- 岡本 勲(1974)「『和英語林集成』と『日葡辞書』(資料編)」『文学部紀要』8-3、中京大学学術研究会
- 高田衛 (1990)「『八犬伝』を読むために」『南総里見八犬伝』第一冊、岩波文庫、p362
- 高谷道男編訳(1959)『ヘボン書簡集』岩波書店、p172
- 飛田良文(1964)「和英語林集成の『和英の部』について」『文化』27-4、東北大学
- 飛田良文(1965)「『和英語林集成』の語彙の性格——江戸期節用集 との比較から——」『文芸研究』50、東北大学
- W. E. Griffis(1913). *Hepburn of Japan and his wife and helpmates*. Westminster Press.